

由比が浜

「日蓮房が縛られた」

「日蓮房がつかまえられた」

鎌倉の町に、日蓮捕縛の噂は一瞬地震のごとくに伝おつた。

「それっ、みに行け」

「念仏の仇敵日蓮坊主がつかまつた。さても気味のよいことだ」

「あの傲慢な面が、しばられたら、どうなるか面白いぞ」

口々に叫びながら、戸毎に飛び出して、役人に守られた聖人の後を追って、かけだしたのである。

「おやつ、こりや大変じゃ、問註所には行かんらしいぞ」

「本当だ、何処へ行くのか、面白うなってきたわい」

なる程、聖人を引き立てた役人は、若宮大路（八幡通り）に出ると道をまがることなく真直に

往った。八幡通りは十八丁余で海に出る。問註所に引きたてるのなら道を右折しなければならぬ。これは訊間もなく処断ということの意味する恐ろしい処置である。

松並樹がつきると、さあつと潮風がまともに吹きつけてきた。五月の空の下に、由比浜の海はまばゆいばかりに白く光っていた。

「舟だ、舟だ」

「遠島だ……」

群衆は先き廻りをして、浜辺に出ていた。なぎさには、余り大きくないが官船が波にもてあそばれて待っているのだ。恐ろしいことが五月の白日の許に行われていた。一回の訊間もなく直ちに流罪とは類のないことである。今まで、口々にのしりながら、ここまでついてきた人達も、眼の前に舟をみてはこの意外にあきれて静まりかえってしまった。

聖人をとりかこんだ役人達は、群衆の感情とは全く別物で静かにおそろしいことを平気でいっていた。

舟は砂地によせられた。今は召人となった聖人の乗船を促している。

聖人はおくする色もなく船にのられた。乗船と同時に縄はとかれたとみえて、聖人は舶先に立つて、くが地を屹つと御覧になった。

この時である。二人の若い僧侶が砂丘のかけから矢のごとく走ってきた。

「お師匠さま……」

「お聖人さま……」

血を吐く思いのこの声には、さすがに船頭も棹をさす手の力がぬけた。

二人とも、水の中を忘れて、舶先にとびつくのであった。

「退け退け。召人に従者は許さぬぞ出船だ……」

船頭は棹で水面をはたいた。

「おう、日朗に日興か……」

「お師匠さま……」

「お聖人さま……」

「これ騒ぐな……役人のいうところによれば、日蓮只今より伊豆の伊東とやらに流される由、……既に法華経に命をささげておるこの日蓮、立正安国論を北条時頼殿に献上したからには、流罪死罪も覚悟であった。今更あわてるは、師匠の日頃の戒めが弟子に及ばぬ証拠……」

「お師匠さま……」

「お聖人さま……」

日朗（この時十九歳）日興（この時十六歳）の二人の弟子は、波に足をさらわれながら、あふれ出る涙を拭くおうともせず、舶先にすがらんと両手をもがくのだが、波にもてあそばれた舶先

は、ややもすれば兩人の頭上に落ちかかろうとするのだった。

「今日は五月十二日、日蓮は今から二十九年前の五月の十二日に房州は清澄寺に出家得道したのである。しかるにその出家得度したる日も同じ、月も同じの今日の日、仏が、今者已満足と説かれた法華経の故に流罪に処せられるとは、日蓮法華経の行者の万分の一にあたるかと思つて、ただただ法悦至極の極みじや。日朗よ日興よ、そんな陸地における人々には、この船は、世を騒がす召人を捕へたる船とみるであらうが、この日蓮が法悦の眼をもつてみる時は、法華経の行者が乗る大白牛車にもすぐれたる日本国の一切衆生を救うべき大法船と中すべきだ」

「日朗！」 「はいっ」

「日興！」 「はいっ」

「泣くでない、この様な時には法華経の行者と、その後につづく者は、題目を唱えるのじや。題目を……」

「南無妙法蓮華経……」

「南無妙法蓮華経……」

「日朗は日昭とともに日蓮なき後の鎌倉をよくく護れよ……」

「お聖人さま、私は……」

「お日興、お前はなあまだ、歳十六……」

「お聖人さま、流罪の地は伊豆の伊東と聞きました。鎌倉より伊豆の伊東は陸地つづきでござい
ます。舟が出ましたら、海上の帆をめあてにくがちより追いかけて申します。そうなしなければ
この日興がまんがなりません……」

聖人の返事を掻き消すように、出船を告げる法螺貝の音が上った。舟は聖人をのせて伊豆の伊
東へ向かった。

